

先週の講壇から

「小さな祈り」

ヨハネによる福音書 第6章1節～15節

聖句「ここに大麦のパン5つと魚2匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」(6:9)

1. 《ロバ選手》 1996年アトランタ五輪女子マラソンの金メダリスト、ファティマ・ロバ選手はエチオピア出身です。アベベやゲブレセラシエ等、歴史的なマラソン選手を輩出した理由として、高地の低酸素と交通の不便さを挙げていました。山国で交通の便が悪く、道路も整備されていないため、人々は歩き、且つ走るのです。不足や不便から何かが生まれる世界もあるのです。
2. 《トラブル》 札幌の教会では、教会員が総出で修養会や見学会に出掛けることが多かったのですが、業者に予約していた弁当が出発時間になっても届かないというトラブルが何度もありました。私たちは、数十人分の弁当のことで悩んでいますが、聖書の「五千人の養い」の大変さは想像を絶します。男の数だけで5千人と言うので「女子供が数にも入らないのか」と憤慨される場面です。勿論、差別もありますが、古代社会では、数を数えるという行為そのものが労働力の計算でしかなかったのです。「何馬力」と言うのと同じです。「人里離れた所」だから「群集を解散させましょう」と、弟子たちが提言するのではなく、「ヨハネによる福音書」では、イエスさまが「この人たちに食べさせてあげたい」と望まれるのです。
3. 《足りない》 弟子たちが「このままでは困ったことになる」と成り行きを心配したのではなく、イエスさまの願いから始まっているのです。けれども、相談を受けたフィリポは「2百デナリオンの大金があったとしても足りない」と匙を投げてしまいます。アンデレも「大麦パン5個と魚2匹」の弁当を持った少年を連れて来たものの「何の役にも立たない」と嘆くばかりです。大麦パンは日本の粟飯や稗飯のおにぎり、魚と言っても煮干魚です。でも、イエスさまの願いに応じて、少年は差し出したのです。そして、それは貧しくとも、お母さんが愛情を籠めて作った弁当でした。その時に奇跡が起こったのです。たとえ高価な物でも、不要な物、余り物を差し出すことは献げることではありません。たとえ質素な物でも、自分の大切な物を差し出して行くところに「献身」があるのです。

朝日研一朗牧師